
2013年度第2回FD研修会のご報告

2013年12月18(水)の定例教授会前(13:30～14:20)にFD研修会として「2013年度の第2回FD研修会」が行われました。これまでのFD研修会は授業評価や名物授業の報告会が多かったのですが、図書館が新しくなるなど学内環境も変化してきていますので、今回は授業方法の改善に直結する課題を2つ研修会として取り上げました。新図書館と情報機器活用です。新図書館からは「どう使えばいいの?ラーニング・コモンズがある新しい図書館:調べる,しゃべる,仕上げる,学びのスペース」と題して、附属図書館館長の太田耕人氏がラーニング・コモンズの理念について、研究協力・附属学校支援課の山本綾乃氏が新図書館の設備や利用方法について講演がありました。情報機器活用としては、体育学科小松崎敏氏が初歩の情報機器活用の実例についての紹介がありました。以下、順番にご報告いたします。

まず最初は、附属図書館館長太田耕人氏のラーニング・コモンズの理念についてです。

<ラーニング・コモンズの理念>

「コモンズ」とは市町村の中心にある共有地で、行事などで住民が集う場所から学生が集う「学びのための共有地」という意味を持っています。この施設の第一号は1994年南カルフォルニア大学の「インフォメーション・コモンズ」でした。端末が並ぶスペースでMSオフィスや統計ソフト、電子ジャーナルへのアクセスができるだけでしたが、「情報が書物に代わる」という点で世界中の図書館に過大な評価と反応が起きました。このインフォメーション・コモンズの機能は、情報機器の提供という点は



情報処理センターに移行し、一方、資料を用いディスカッションする場合はラーニング・コモンズ(LC)に引き継がれ、自分の考えをまとめて他の学生と議論をする、日本でいうと学生控え室、ゼミ室、教

員の共同研究室のような存在です。

2010年12月に文科省の科学技術学術審議会によるLCの定義は、以下のようになっています。

- ・ 複数の学生が集まって
- ・ 電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて
- ・ 議論を進める学習スタイルを可能にする場
- ・ コンピューター設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを支援する 図書館職員によるサービスも提供^{注)}

(注：コンピューターを用いた様々な検索システムを教えること、検索した資料の入手を助けること、その資料を使って自ら資料を構築できること(ライティング指導まで実施すること)です。このライティング指導には専門的能力が要るので日本では出来ていませんが、大学院生をTAで用いることでLCに入ってもらい、ライティング指導を行おうと模索しているようです。)

< LCでの学修と講義との対比 >

LC		講義
双方向の意思疎通	⇔	一方向の情報伝達
能動的学習	⇔	受動的学習
ヒエラルキーなし	⇔	教師/受講者間にヒエラルキー
くつろいでいる	⇔	堅苦しい

となりますので、LCに自由な発想で創造的知見を生む可能性があることとなります。

LCは自習室とは以下の点が異なっています。

- ・ 館内で文献を入手し参照
- ・ BSCO HOST・Discovery等の検索
- ・ DB, リポジトリ, 電子ジャーナルが扱える
- ・ パソコンでの資料作成・印刷
- ・ パワーポイント等でのプレゼンテーション
- ・ 電子黒板を使った議論
- ・ (現在はまだできていませんが) 職員による支援

LCと大学教育との質的変換を文科省は奨励しています。それによって、
学生：受動的に「教わる」→能動的に「学ぶ」(能動的に対応できる力をつけさせることが必要)
教員：熱心に「教える」→「学ばせる」環境作り
と、大学教育も随分変わっていくこととなります。

< LCで学ばせる先生たちへのお願い >

1. 参考資料の紹介(最近の学生は本を読まない, 半数の高校生が1年間に1冊も読まない)
2. グループでのレポート・発表の設定
3. LCでの論文収集法講座への参加の勧め(図書館でやっています)
4. 授業単位でのライブラリーツアー(事前に図書館に連絡した上で)→その授業に必要な資料検索を紹介するなどカスタマイズが可能
5. セミナー室での授業→調べ物はLCで, ということでした。

次に, 研究協力・附属学校支援課の山本綾乃氏による, 国内外の事例と新図書館の設備や利用方法についての紹介がありました。

<国内外の事例>

LCがある新しい図書館（国内での早い設置例）

国際基督教大学

2000年に増築した棟の2フロア分、PC120台のフロアでグループ学習エリア、ブレイクエリア、ライティングサポートエリアがある。

ライティングセンターを設置、TAを置き、学習支援を行っている。

お茶の水女子大学附属図書館
PC70台、グループ学習室がある。

- ・ラーニングアドバイザー(LA)を導入している。
- ・LAと教員の間で授業内容について連絡をして協力している例もある。
- ・LAは、元々は機器類のサポートを行うための情報アドバイザー（教えるのではなくサポートする）であった。



<LCの特徴>

国内で設置されたLCの特徴は、玉川大学河西由美子氏の「学びの空間が大学を変える」ボイックス、2010によると以下の点が挙げられるようです。

- ・図書館メディアを活用した自立的な学習の支援
- ・情報リテラシー教育とアカデミックスキルの育成
- ・協同的な学びの促進

Roger Williams Univ.のMcMulle.S.によるLCの定義(US. Academic libraries:today's learning commons model, OECD,2008)としては、

- ・ computer workstations clusters
- ・ a service desk
- ・ collaborative learning spaces
- ・ presentation support centres
- ・ instructional technology centres for faculty development
- ・ electronic classrooms
- ・ writing centres and other academic support units
- ・ spaces for meetings, seminars, receptions programmes and cultural events
- ・ cafe's and lounge areas

が存在することが必要なようです。

<新図書館の設備や利用方法についての紹介>

本学新図書館の LC の設置場所は北館 2 階で、以下の部屋があります。

コンピューター室：IPC 端末 15 台、席は個別席と二人席があります。

続いてグループワークエリア：ディスカッションゾーン、リラククスゾーン、グループ学習室があります。また、セミナー室(1),(2),(3)があり、そこには可動式の机やいすがあります。特に、セミナー室(1)にはプロジェクター、スクリーン等の視聴覚機器があり、利用は申込制で予約できます（研究協力・附属学校支援課，図書情報グループまで）。

さらに、企画展示室があり、様々な展示に使用でき、利用は申込制で予約できます（研究協力・附属学校支援課，図書情報グループまで）。

リフレッシュラウンジ：飲食できるので、リラックスしてグループワークを進めることができる。かべかけホワイトボードもあります。

<図書館で計画されている、「これからの LC」>

- ・設備面の充実：まもなくテレビ会議システムが入る予定
- ・サービス面の展開：多人数のデータベース講習会，個別対応の人的サービスは今後対応する予定

最後は体育学科の小松崎先生による情報機器の活用ですが、how to ものはやってみれば使えるようになるので省略し、情報機器のこんな使い方もあるという興味深い紹介がありました。

・授業風景を録画した DVD をパソコンに落とし込み、プロジェクターで投影する。

・書画カメラや Web カメラで感想文等をプロジェクターに投影し、タブレット端末で文字等を書き込むこと。タブレット端末がない場合は、書類の上にクリアファイル等をのせて、その上から書ける。

・TV 番組をパソコンに録画して、タブレット端末で描き込み、動画を説明すること、またはスロー再生

・USB の機能を使ったストップウォッチで、中・長距離走のラップタイムを測定する方法が紹介されました。



今回、FD 委員会は、新しい FD の進め方として授業方法の改善に直結する課題を 2 つ研修会として取り上げました。研修会の参加者も 50 名となり、新しい FD 活動として一定の支持が得られたと思われる。ここで、研修会後のお二人の談話を紹介します。

教員が過去の学生時代に自分が習った学習スタイルを踏襲して学生に教えるということが出来ない時代になってきたことがわかります（安東副学長談）。学習環境が整備されてきて、学生達が能動的な学びを進めるということ、そしてその体験を通して学生達が修得したものを将来教師になったときには児童・生徒への授業方法として活かしていくことができるか、という新しい FD 活動の進め方になると思います（学長談）。FD 委員会はこれからも新しい FD 活動を模索していきます。

「平成25年度 大学院授業アンケート」調査結果

平成25年11月25日～平成26年1月31日（延長56日）の期間、授業の改善に役立てることを目的に大学院教育学研究科授業アンケートを実施しました。以下では、設問順に結果をお知らせします。

質問1. 所属専修をご記入ください

提出者数（所属院生数）で表すと、学校教育専修：2(50)、障害児教育専修：6(11)、国語教育専修：3(8)、社会教育専修：3(12)、数学教育専修：3(8)、理科教育専修：7(27)、音楽教育専修：3(8)、美術教育専修：0(12)、保健体育教育専修：1(11)、技術教育専修：1(7)、家政教育専修：4(7)、英語教育専修：7(11)となり、全体では40(172)で23.3%の回収率でした。なお、昨年度は42.7%の回収率でした。

質問2(a). 教育学研究科の授業内容は、全体として、あなたの期待に応えるものでしたか

「期待以上」は12人、「期待どおり」は20人、「期待はずれ」は1人、「その他」（未受講など）は7人でした。「期待以上」と「期待どおり」で80.0%（昨年度は91.8%）を占めています。「その他」としては、「学部とかぶる内容の授業があった」、「授業によって差があった」などの記述がありました。

質問2(b). 「実践特別演習」は、あなたの期待に応えるものでしたか

「期待以上」は5人、「期待どおり」は21人、「期待はずれ」は3人、「その他」は11人でした。「期待以上」と「期待通り」で65.0%（昨年度は89.0%）を占めています。「その他」としては、「授業によって差があった」、「履修していない」などの記述がありました。

質問2(c). 「教科内容論」は、あなたの期待に応えるものでしたか

「期待以上」は11人、「期待どおり」は18人、「期待はずれ」は2人、「その他」は9人でした。「期待以上」と「期待通り」で72.5%（昨年度は89.0%）を占めています。「その他」としては、「授業によって差があった」、「履修していない」などの記述がありました。

質問2(d). 「学校教育実践総論」は、あなたの期待に応えるものでしたか

「期待以上」は10人、「期待どおり」は24人、「期待はずれ」は0人、「その他」は6人でした。「期待以上」と「期待通り」で85.0%（昨年度は78.1%）を占めています。「その他」としては、「未受講」などの記述がありました。

質問3. 期待どおり・期待以上の科目の理由（どういう点がよかったのか）

主な意見としては、次のようなものがありました。

授業の専門性に関する意見

「深い内容に触れるものが多く、最近の動向を踏まえて考えさせられる内容が多かった」

「様々な先生から講義が聴けて、広く深く学ぶことができた」

「知ることすべてが新鮮であった」

「専門知識や考える視点を得ることができた」

「学校教育について、障害児教育、心理学、教科教育の視点で見ることができ、視点の関連性や

相違点が発見できておもしろかった」

「学部の授業より専門的で、様々な分野の話題を学べた」

「実践の中でこれまで気づかずに通り過ぎたことを整理する機会になった。また、新たな発想や発想の転換を見出す機会となった」

授業の形態に関する意見

「講義を聴くだけでなく、自分で考え、発信する機会があった。また、他者の考えが聞けた」

「教育や研究の今日的な課題について、異なる専攻や年代の人と議論ができた。また、少人数で行う授業が多く、学びが充実していた」

「意見交流を通して理解を深化することができた」

「現職、留学生など多様な意見交流ができた」

「学生同士で互いの意見や考えを聞けたことがよい刺激になった」

「現職の教員の話聞ける機会があった。また具体的に研究の仕方を教えてくれる授業があった」

「野外実習などで自然に触れながら学ぶことができた。また現職の先生と討論することができ、現場で考えるべき内容を学ぶことができた」

「先生と近い距離で関わられた」

授業の有益性に関する意見

「今後の教員生活で役立ちそうな授業（教材作り、実験など）ばかりであった」

「聞いておきたい内容を聞けた」

「現場で活かせる知識を得た」

教員の対応に関する意見

「学生の問題意識を丁寧に受け止め、授業内容に反映させていた」

「担当教員が授業の内容等、柔軟に対応した」

「シラバス通りに授業が進んだ」

「理論と実践を関連させて指導してくれた」

「非常に丁寧に説明してくれた」

「学生の様子を見つつ、学生の理解に合わせた内容の授業をしてくれた」

質問4. 授業内容が期待にそぐわない場合の理由（どういう点が期待通りではなかったのか）

記述されていた意見は5件のみで、a「授業の目的が明確ではなかった」という内容が3件、b「何も身につけなかった」、c「各自で調べ学習をしたものを発表するという形式をとっていた。自ら調べて知識がつくかもしれないが、特論という性質上、教員による講義があってもよかったのではないか。授業時間を使ってやることかと少し疑問に思った」という内容が各1件でした。aとbの意見については授業内容との関連は不明ですが、cのような形式の授業で「何故このような形式で授業を展開するのか」という授業の目的が学習者に明確に伝わらなかったとすれば、cの意見はaやbの意見に結びつく内容になると感じました。

質問5 (a). 何割くらいの授業が体系的で良くまとまっていたと思いますか

「ほとんどすべて」が11人、「約8割」が14人、「約半分」8人、「約2割」が3人、「ほとんどなかった」は0人、「その他」（登録していないなど）が3人、無回答1人でした。約8割以上の授業が体系的で良くまとまっていたと思う院生の割合は62.5%（昨年度は65.8%）でした。

質問5 (b). 何割くらいの授業が分かりやすいと感じましたか

「ほとんどすべて」が12人、「約8割」が11人、「約半分」11人、「約2割」が0人、「ほとんどなかった」は1人、「その他」（登録していないなど）が3人、無回答2人でした。約8割以上の授業が分かりやすいと思う院生の割合は57.5%（昨年度は67.1%）でした。

質問5 (c). 何割くらいの授業で、担当教員が受講生の理解や反応を受け止めながら授業を進めていたと思いますか

「ほとんどすべて」が18人、「約8割」が9人、「約半分」8人、「約2割」が1人、「ほとんどなかった」は0人、「その他」（登録していないなど）が3人、無回答1人でした。約8割以上の授業が受講生の反応を受け止めていると思う院生の割合は67.5%（昨年度は75.3%）でした。

質問5 (d). 何割くらいの授業においてシラバスが参考になりましたか

「ほとんどすべて」が14人、「約8割」が8人、「約半分」9人、「約2割」が3人、「ほとんどなかった」は2人、「その他」（登録していないなど）が3人、無回答1人でした。約8割以上の授業でシラバスが参考になったと思う院生の割合は55.0%（昨年度は53.4%）でした。

質問5のなかでは、この項目（＝「シラバスが参考になったか」）についての肯定的な回答の割合がもっとも低くなっていました。

質問6. 現職教員とストレートマスターとの合同授業で感じたこと（配慮して欲しいこと）があれば、記入してください。

それぞれの立場から、授業に対するプラス（肯定的）意見、マイナス（不満を感じている）意見がありました。内容をまとめると、次のようになります。

プラスの意見

ストレートマスターの立場から

「今後役に立つ意見が聞けるので良い」

「ストレートマスターでは知ることができない内容に触れることができ、大変良かった」

「意見が出し合えて刺激になった」

「現職教員とのディスカッションの機会をより増やしてほしい」

現職教員の立場から

「若い方の考えに触れることができ、新鮮で良かった」

マイナスの意見

ストレートマスターの立場から

「現職教員の経験談ばかりで盛り上がり、ストレートマスターが議論に入り込めず、発言の少なさが成績に影響しないかと心配」

「ディスカッションで一方的に現職教員が喋る場合が多かった」

「班活動があると連携が取りにくい」

「授業準備など、現職教員も平等に行ってほしい」

現職教員の立場から

「ストレートマスターの積み上げに比べ、学生時代に学習したことは忘却の彼方。ハンディを感じている」

質問7. 各自の「課題研究」（修士論文の執筆）に関して困っていることがあれば記入してください。

記述件数は多くなかったのですが、「IPC、図書館のPC、プリンターが1月から使えなくなったこと」など、**情報処理センターや図書館の閉館期間に関する不満**が複数件ありました。その他の記述をまとめると、次のようになります。

図書などに関する要望や不満

「それぞれの専門の中での主要なジャーナルの充実を望みたい」

「研究室配架の図書が多く、非常に不便」

「資料探しに困っている」

「学生便覧を分かりやすく工夫してほしい」

自身の能力や都合による不安

「英文論文の執筆がクリアできるか不安」

「執筆量が多すぎる」

「現職なので時間が十分にとれない」

「期日に間に合うか不安」

「意義ある結果が出せるか不安」

「資格のための授業を取ると時間割が詰まってしまう、担当教員との予定あわせが難しい」

質問8. 「その他」の自由記述

記述件数は少なかったのですが、このアンケートに関する要望が2件ありました。その他では大学や受講のシステムに関する不満や、教員に対する厳しい指摘もありました。記述された内容は、次のとおりです。

アンケートに関する要望

「このアンケート調査の目的を思えば、各専攻・専修毎にもっと具体的な記述が必要と思われる。アンケート調査項目の見直し、改善を期待する」

「M1、M2でアンケートの内容を変えた方が良い」

大学や受講のシステムに関する不満

「宿泊届を出さないといけない制度が大変」

「特論、特講のような科目に他専修の学生が加わると、内容の専門性が低下し、物足りなさが残る」

教員に対する指摘

「授業延長、遅刻など教員の授業時間のルーズさに呆れる」

以上の調査結果を、今後の授業改善に役立てていただけたら幸いです。

問い合わせなどは、下記の委員までお願いいたします。

FD委員会委員：安東（委員長）、村田（副委員長）、内田、巻本、藪根
事務担当：高松、相原、大谷